

宗教集団の展開と構造 回心類型と宗教年鑑データ にもとづく一考察

著者	徳田 幸雄
雑誌名	論集
巻	33
ページ	1-15
発行年	2006-12-31
URL	http://hdl.handle.net/10097/00129808

宗教集団の展開と構造

——回心類型と宗教年鑑データにもとづく一考察——

徳 田 幸 雄

序 論

拙著『宗教学的回心研究——新島襄・清沢満之・内村鑑三・高山樗牛——』（未来社、二〇〇五年）は、一般に回心と呼ばれる宗教的な再生体験に宗教学的にアプローチする試みであるとともに、そこで浮き彫りにされる「個」の逆説的な在り方に着目した、人間学的な考察の試みでもあった。その焦点が、「個」としての人間の在り方にあつたことは言うまでもない。それに対して本稿の着眼点は、回心と「集団」との関係にある。この点に関して言えば、本稿は『宗教学的回心研究』の人間学的な着想を、「個」から「集団」へと拡張させるといふ、筆者にとり大胆な挑戦である。ただし、この新たな試論も、筆者の構想する「宗教人間学」の一部であり、人間の本質規定をその宗教性に求める、いわゆるホモ・レリギオスという人間理解によつて支えられている。したがつて本稿は、宗教理解が人間理解に直結するという基本的な見地に立ちつつも、回心という独自の切り口から宗教集団の展開と構造について考察する試みに他ならない。以下、回心と宗教集団との関係に論及した先行研究を概観したうえで、筆者の持論とそれを裏付けるデータ分析を提示し、改めて人間学的な考察を加えることにしたい。

一、先行研究の諸議論

回心研究において、回心のコンテキストとして宗教集団が注目されるようになったのは、比較的近年のことである。少なくともスターバックやジェイムズに代表される古典的な心理学的回心研究は、回心を「個の内側」の問題として扱い、そこにおいて宗教集団への配慮があったとは言い難い。彼らの関心が、もっぱら人間の内面に潜む神秘をいかに科学的に把握するかという点にあったことを鑑みれば、個をとりまくコンテキストが視野に入らなかったとしても不思議ではなからう。このように「個の内側」を掘り下げてゆこうとする視点を、一転して「個の外側」、とりわけ個をとりまく人間関係へと振り向けたのは、一九六〇年代以降のアメリカにおける新宗教運動の興隆に触発された一連の社会学的回心研究であった。なかでもとくにここで着目したいのは、宗教集団の性質にしたがって、そこで生ずる回心のタイプも異なることを指摘した諸議論である。例えばオースティンは、L—Sモデル（ロフランドとスタークによる統一教会への参与観察から導出された七段階の入信過程モデル）を検証する論文¹のなかで、そのモデルの有効性が、回心のタイプのみならず宗教集団にも依存することを論じている。具体的に言えば、L—Sモデルが有効なのは、霊的な再生を意味する「心理的回心」（psychological conversion）であり、それはキャンパス・クルセード・インターナショナルや統一教会で見られる回心である一方で、例えばモルモン教で一般に見られる、所属教会の変更を指す「組織的回心」（structural conversion）は、L—Sモデルが当てはまらないという。彼の意図は、L—Sモデルの有効性を検証することにあつたと言えるが、ここでは回心のタイプが個人の心理的資質というよりも宗教集団の相違に帰せられている点に留意しておきたい。このように宗教集団によって回心のタイプが異なるという視点は、ISKCON（クリシユナ意識国際協会）とDLM（Divine Light Mission）の比較を試みたピラルジックの所論²にも窺える。それによれば、ISKCONは絶対主義的な社会組織であり、そこでは過去の生活からの根本的な決別が求められるという。そのような状況で生ずる個人的変化を、ピラルジックは「セクト的回心」（sectarian conversion）と呼んだ。

その一方で、個人主義的な志向性が許容される社会組織である DLM で生ずる個人的変化は「カルト的代替」(cultic alienation)と規定された。「セクト的回心」が、それまでの世界観やアイデンティティの根本的な転換であるのに対して、「カルト的代替」はそれまでのアイデンティティの部分的な転換に過ぎず、過去との連続性も認められる、という。こうしたピラルジックは、若者文化を背景とする入信者には、少なくともこうした二つの個人的な転換過程があると結論づけたのである。これら「セクト的回心」と「カルト的代替」という概念は、ノックによる非連続的な「回心」(conversion)と連続的な「追従」(adhesion)という古典的な概念区分に重なり、その概念自体は決して目新しいものではない。しかし、両者の相違がそのコンテクストといえる宗教集団の性質に依つていふことをフィールド調査によつて実証的に示した点は注目すべき点であろう。これらオースティンの研究とピラルジックの研究いずれにおいても、回心のタイプの相違が、個人の心的資質というよりも、宗教集団の性質に帰せられていることを、ここで再度強調しておきたい。

先述した回心と宗教集団との相関関係への着想に新たな視点を加えていると思われるのが、創価学会への参与観察に基づいて L-S モデルを検証したスノウとフィリップスの研究である。⁴ そのなかで彼らは、統一教会への回心過程を記述する L-S モデルが創価学会への回心過程に当てはまらないことに着目し、宗教集団の組織構造によつて回心過程が異なる可能性を示唆した。ちなみに彼らによれば、統一教会が「共同体的集団」(communal group)である一方で、創価学会は「非共同体的集団」(noncommunal group)であるという。要するに、内部での結束と外部との断絶を要請する宗教集団(統一教会)と、そうではない宗教集団(創価学会)とでは、回心過程が異なるというのである。この主張は、先述したオースティンやピラルジックの研究と大きく隔たっているわけではない。スノウらの研究で注目すべきなのは、集団構造の相違に加えて、それらの社会的評価の相違にも言及している点である。具体的に言えば、宗教集団が「尊敬できる」(日蓮正宗)か「特異である」(統一教会)か、との相違である。言うまでもなくこの相違は、個々の宗教集団が有する固有の特質というよりも、

むしろそれを取り巻く社会的評価に基づいている。このことは、たとえ同一の宗教集団であったとしても、その宗教集団の社会的評価が変わればそこでの回心過程も変化することを示唆している。つまりスノウらの指摘に従えば、宗教集団と回心タイプとはステイックに結びついているのではなく、両者の関係は社会的背景によってダイナミックに変化し得るのである。このことは実際に、バックフォードによる回心物語の分析^⑤によってもある程度裏づけられているように思われる。彼は、ものみの塔における回心説明の焦点と教義的な力点とがまさに一致することを論証しつつ、注目すべきことに、回心物語の内容が教団の社会的地位とも関わりがあることを論じたのである。具体的に言うならば、社会的な圧力のあった一九一四～一九五五年の回心物語では、「この世的な力」への敵対姿勢が見られた一方で、圧力のなくなつた一九五五年以降では内的な確信や心の平安が強調されたという。このことは、同一の宗教集団であっても、それが置かれている社会的状況あるいはその発展段階によって、回心の主題や内容が異なることを如実に物語っている。この点を、歴史学の観点から実に興味深い議論を展開しているのが、ブリットである。その著書『中世におけるイスラームへの回心』^⑥は、中世のムスリム人名辞典を手掛かりとし、「革新の伝播」(innovation diffusion)の理論を道具的に用いることによって、中世の中東諸国におけるイスラームの伝播を新たな視点から説明しようとした画期的な試みである。そのなかでブリットは、中東の各地域におけるイスラームの伝播がほぼ正規分布に従うことを示し、数学的に基礎づけられる伝播段階を提示した。比較的資料が揃っているイランを例にとれば、イスラームへの回心者は次に示す五つのグループに分けられるという。

- (一) 「革新的受容者」(innovators) … 最初の二・五%、六九五以前に回心した人々
- (二) 「初期少数受容者」(early adopters) … 次の一三・五%、六九五～七六二年に回心した人々
- (三) 「前期多数受容者」(early majority) … 次の三四%、七六二～八二〇年に回心した人々
- (四) 「後期多数受容者」(late majority) … 次の三四%、八二〇～八七五年に回心した人々

(五) 「受容遅滞者」(laggards) …最後の一六%、八七五―一〇〇九年に回心した人

ここでとくに注目すべきは、先述の伝播段階によって、回心の担い手や動機の異なることが指摘されている点である。詳述すれば、(一)の人々は、ムスリムとなることで奴隷になることを避けることのできた、戦争捕虜やきわめて社会的身分の低い人々であり、(二)の回心者は、古い宗教を捨てることで希望をもつことのできた職人や商人たちであり、それ以降の(三)～(五)における回心は、ムスリムになる妨げが既にあることから、知識の普及がおもな動機であったとされる。確かにブリット自身は、イスラームの伝播段階に従って、回心タイプが異なるとは言明してはいない。しかしながら、迫害や社会的圧力に晒されがちな初期における回心と、宗教集団がある程度市民権を得た後期の回心とは、その動機や主題からしてまったく異質なものと考えて差し支えないであろう。ここでは、ブリットが、宗教集団の発展段階や社会的位置によって回心のタイプが異なることを歴史的に明らかにしたと見ておきたい。

以上で概観した先行研究の議論はいずれも、回心の内実が、その社会的コンテキスト(宗教集団とその社会的背景を含む)と密接に結びついていることを論じている。このこと自体はもはやさらなる検証を要することでもなからう。むしろ問題となるのは、どのような回心が、どのような社会的コンテキストと、いかに結びついているかという点であろう。次節では、この点について持論を述べることにしたい。

二、回心類型と宗教集団の展開と構造

前節で概観した諸議論に示されているように、回心のタイプと、それが生起する社会的コンテキストとの間に、何らかの相関関係があるでしょう。本節では、その相関関係に独自の視点から考察を加え、ある仮説を提示することにした。まずその議論の起点となる回心の三類型を提示しておく。この三類型は、拙著『宗教学的回心研究』にて、とくに「宗教的回心」

を概念的に際立たせるために提起したものであり、自己超越の相違を基軸としている。なお、この類型論の学説史上の位置づけや意義については、拙著に譲ることにしたい。問題の三類型は、次のとおりである。

「自然的回心」：「自己保存」を中心契機とし、利己的で合理的な選択による。

「道徳的回心」：「自己犠牲」を中心契機とし、利他的で道徳的な決断による。

「宗教的回心」：「自己否定」を中心契機とし、非合理的で非道徳的な啓示や悟りによる。

ここで本稿の議論の鍵となる「宗教的回心」の概念についてももう少し踏み込んで説明を加えておきたい。「宗教学的回心研究」で詳述したように、「宗教的回心」は「垂直軸の受動的獲得」という点で特徴づけられる。「垂直軸」とは、非合理的な次元から開示されながらも、人間の存在構造を根底から支える中心軸のことである。興味深いことに、この「垂直軸」は、人間の能動的な能力や活動の所産ではなく、向こう側から一方的に示される。別言すれば、人間の能動性の一切が否定され尽くされるところ、いわゆる「自己否定」の極致で、それは「受動的に」獲得されるのである。したがって「宗教的回心」は、必然的に合理性や能動性を斥ける性質を帯びることとなる。その合理性と能動性という観点から、他の回心について論及すれば、「道徳的回心」では、人間の能動性が許容されており、「自然的回心」では、それに加えて合理性をも許容されていると言えよう。この各回心の性質を念頭に置きつつ、さらに社会的背景との関係に着目すれば、先述した回心の三類型は、近代社会に対して拒絶的な「宗教的回心」、批判的な「道徳的回心」、迎合的な「自然的回心」となる。さらに宗教集団の発展段階との関係から言えば、しばしば迫害や社会的な圧力を被りがちな初期段階ではおもに「宗教的回心」が、そしてその宗教集団が社会に根を下ろし、徐々に社会から認められるにしたがって、「道徳的回心」そして「自然的回心」が主要な位置を占めるようになってゆく、となろう。ただしそこでは、生起する回心が「宗教的回心」(初期)↓「道徳的回心」↓「自然的回心」(後期)と移り変わってゆくというよりは、「宗教的回心」に「道徳的回心」が、さらには「自然的回心」が

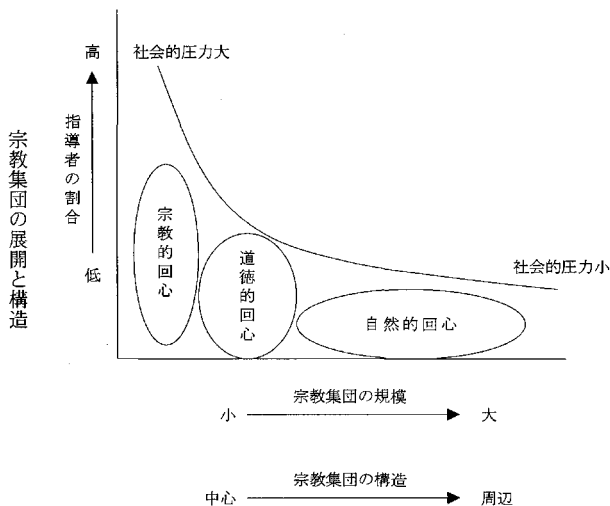


図1 宗教集団の展開と構造のイメージ

次々と加わってゆくことが想定されている。換言すれば、宗教集団が社会のなかで安定した営みを実現できるほど十分に発展すれば、より多様な回心が許容される、ということである。確かにこれらの考察は、実証的な裏づけを欠く一つの洞察に過ぎず、仮説の域を出るものではない。しかしこの洞察は、後述するように、具体的なデータにある程度裏打ちされる新たな議論の糸口となるのである。

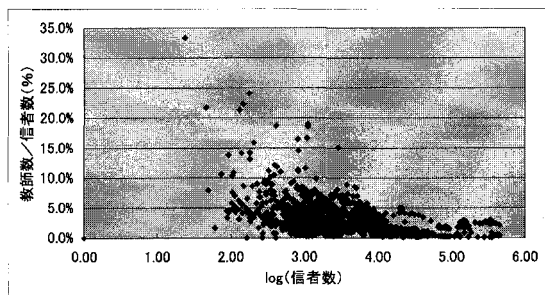
ところで仮に「宗教的回心」が、宗教集団の一般信者よりも、創始者あるいは宗教的天才と称される、宗教集団の中心的な指導者に比較的多く経験されているとすれば、先に提示した回心類型は、宗教集団の発展段階のみならず、その構造とも深い関わりをもつことになる。つまり、宗教集団の中心には「宗教的回心」があり、その外側を「道徳的回心」、そして「自然的回心」が取り囲むような構造がそれである。このような宗教集団の構造と、先に論じた宗教集団の展開とを視覚化させたのが【図1】である。以下、この図に説明を加えながら、本節での議論をまとめておくことにしたい。

宗教集団が誕生して間もない頃は、集団の規模はそれほど大きくなく、したがって指導者の割合も比較的高いと思われる。このことは、「宗教的回心」の割合も高く、よってその集団が靈性に富むことをも示唆している。そのような宗教集団が、合理的な近代社会の圧力を被りがちなことは想像に難くない。しかし、宗教集団が大きくなると事情は変わってくる。宗教集団の裾野が広がるにつれて「道徳的回心」

および「自然的回心」の割合が増えてくれば、それだけ宗教集団の道徳性や合理性が高められ、より社会に根を下ろすことが可能となる。こうした宗教集団の展開が、【図1】の右下がりの曲線によって示されている。さらに、横軸を宗教集団の構造に置き換えれば、「宗教的回心」を経験した一握りの指導者を、概して「道徳的回心」や「自然的回心」を動機とする信者たちが取り囲むという集団構造が浮かび上がってこよう。以上で述べた宗教集団の展開と構造に関する洞察を踏まえて、小規模な宗教集団、したがって発展の初期段階にある宗教集団では、概して指導者の割合が高く、大規模な宗教集団ほど、指導者の割合が低くなる、という仮説を立てておきたい。

三、宗教年鑑データによる裏づけ

本節では、前節で提示した仮説、つまり信者に対する指導者の割合は、宗教集団が発展し社会的に安定するにもなつて小さくなるという仮説を、具体的なデータによって裏付けることを試みたい。ここで用いるデータは、『宗教年鑑』に掲載されている各宗教団体の「教師・信者数」である。もちろん、この数字を鵜呑みにすることはできない。というのも、そもそも宗教団体によって「教師」や「信者」の規定が異なるからである。実際に、『宗教年鑑』には、「教師」「信者」の規定は各宗教団体に委ねられていることが明記されている。それに加えて、「教師」や「信者」らの概念が曖昧であるか、あるいは現状の把握がままならないためか、毎年まったく同じ数字を繰り返し報告する宗教団体さえある。こうした事情を鑑みると、記載のデータをすべてそのまま信用することはできなくなる。したがって、データと実数との乖離をなるべく小さくするような工夫も必要となつてこよう。そこで、普遍性を犠牲にすることとなるが、データの信憑性を重視してあえてキリスト系の宗教団体のデータに絞ることとした。周知のようにキリスト教では、「信者」は洗礼式によって、そして「教師」は按手式によって、それぞれ儀礼的に明確に規定されているし、メンバーシップを重視する傾向から実数の把握や管理も比

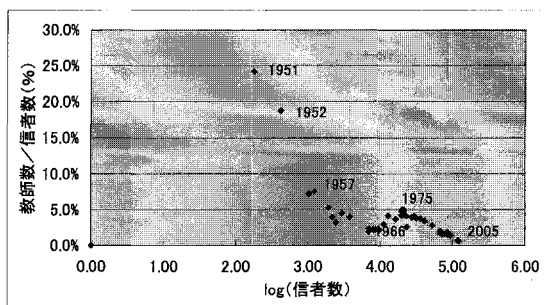


グラフ 1：教団規模と教師割合にかんする分布グラフ
(キリスト教)

較的なされていると思われるからである。さらに、仏教系教団や神道系教団に比べて、キリスト教系の教団は日本における宣教史が浅いことから、教団草創期のデータも容易に入手することも無視できない。これらの理由から、さしあたりキリスト教系の宗教団体のデータを用いて議論をすすめることにする。

さて、宗教集団のもつとも単純な構造が、「教師」と「信者」から構成されているとすれば、両者の比率は宗教集団の基本構造を端的に示す指標となる。この比率が宗教集団の規模によつてどのような違いがあるかを概観することを目的として下記の手順で分布グラフの作成を試みた。まずその縦軸を、「教師」と「信者」の比率、より厳密に言えば、信者数に対する教師数の割合（％）とし、横軸を教団の規模を示す信者数とした。ただし横軸の数値に関しては、宗教団体によつて信者数にかなりの違いがあるため、対数（log）をとっている。これらの座標平面に、文部科学大臣所轄包括宗教法人のキリスト教系宗教団体の、昭和二十三年から平成十七年までのデータをプロットしたものが「グラフ1」である。この作成過程からも明らかのように、この「グラフ1」には、さまざまな宗教団体の、さまざまな時期のデータが同時に示されており、ここからは各宗教団体の特徴や、時間的な変遷を窺い知ることができない。この点については、後に補足するとして、まずはマクロ的な視点から宗教集団の構造を捉えてみたい。

- この「グラフ1」から、宗教集団の構造に関して少なくとも次のことが読み取れよう。
 - 大規模な宗教集団ほど、信者に対する教師の割合のばらつきが小さくなる。
 - 信者に対する教師の割合の高い数値は、小規模な宗教集団に限られる。
- 以上のことから、宗教集団の規模によつて宗教集団の構造が異なるということは十



グラフ 2：教団規模と教師割合にかんする分布グラフ
(末日聖徒イエス・キリスト教会)

分に考えられる。さらに踏み込めば、小規模な宗教集団がほどの構造が多様つまり不安定であり、大規模な宗教集団ほどその構造が安定するとも言えるかもしれない。ここで仮に、小規模な宗教集団を、発展段階の初期にある宗教集団と見なすことが許されるなら、このグラフは先述の仮説、つまり宗教集団が進展するほど指導者の割合が小さくなるという仮説を少なくとも裏切るものではなからう。しかしながら、先述したように、このグラフでは宗教集団ごとの時間的経過がまったく考慮されていないことから、これを先の仮説の実証的な根拠とするにはやや説得力に欠けるところがある。そこで、この点を補う意味で、キリスト教系宗教団体のうち、末日聖徒イエス・キリスト教会（以下、モルモン教と記す）のグラフも提示しておきたい。筆者が同団体を選択した理由は、データのあるおよそ五十年の間に、信者数の変動がきわめて顕著であったことによる。ちなみにモルモン教は、明治三十四（一九〇一）年にはじめて日本に伝えられたものの、多妻結婚問題がネックとなり大正十四（一九二四）年にはほとんど何の成果もなく撤退を余儀なくされたという。しかし、二〇数年の中断期間を経て第二次世界大戦後に日本伝道が再開され、平成十七年の時点で信者数十二万人以上というキリスト教系教団のなかでも屈指の規模を誇るに至っている。したがって『宗教年鑑』のデータは、戦後日本において、モルモン教が飛躍的に発展した過程をほぼ網羅していることになる。その意味で、モルモン教における「教師」と「信者」との比率変動を示す『グラフ2』は、宗教集団の展開に関する典型的なモデルとならう。

この『グラフ2』に示されている左下がりの曲線は、一方向的ではないにせよ、モルモン教が信者を着実に獲得して発展してゆく過程を表していると言ってよいであろう。

う。このグラフを見る限り、多少の揺れはあるものの、宗教集団の規模が大きくなるにつれて、教師の割合は小さくなっていくことが分かる。確かに一宗教集団の事例だけでは必ずしも十分とは言えないけれども、この【グラフ2】によって、前節において図示した宗教集団の展開、つまり指導者の割合の高い小規模な宗教集団から、指導者の割合の低い大規模な宗教集団へ、という展開が裏付けられたことになる。もちろん、【グラフ1】からも明らかのように、「教師」の比率の低い小規模な宗教団体もあるため、その展開をただちに普遍化するわけにはいかない。しかし、集団構造の関する単なる分布図から、その時間的展開を浮かび上がらせた【グラフ2】の意義は決して小さくはないであろう。以上の議論から、宗教集団の発展に伴ってその構造を異にすること、さらに踏み込んで言えば、宗教集団が発展して社会に根づいてゆくほど、信者に対する指導者の割合が小さくなるということが、決して十分ではないにせよ、実証的なデータによつて裏打ちされたと見ておきたい。最後に、このことの人間的な意味を考察して、本稿を締めくくることにする。

結 論

本稿の結論に入る前に、まずその前提となるある仮定について触れておかなければならない。それは、一般の「信者」よりも「教師」と称される宗教集団の指導者の方が、非合理的な啓示あるいは悟りを中心契機とする「宗教的回心」を経験しているであろうという仮定である。確かに、「宗教的回心」を経験している「信者」もいると思われるし、また「宗教的回心」を経験していない「教師」の存在も否定できない。しかしながら、教団の創始者、あるいは刷新者や改革者の経験した啓示や悟りが、しばしばその後の教団発展の起点となり、またそれが宗教経験の典型的なモデルとして重視されている事実を鑑みると、その宗教集団を統率する指導者がそうした先駆者の宗教経験に通ずる世界をもっていると考えるのは決して不自然ではない。反対にそうした世界をもっているがゆえに、指導者になったとも言えるかもしれない。いずれにしても、さ

さまざまな動機で追従する多数の「信者」よりも、宗教集団を牽引する一握りの「教師」の方が、啓示や悟りを中心契機とする「宗教的回心」を経験している可能性は高いと考えるのは、的外れではないであろう。もしこのように「宗教的回心」と「教師」とを結びつけることが許されるなら、「宗教的回心」と宗教集団との関係を次のようにまとめることができる。つまり、宗教集団を支える構造的中心には「宗教的回心」がある一方で、あたかも宗教集団の展開の原動力となっているかのように、その発展初期段階では「宗教的回心」の占める割合が比較的高く、宗教集団の発展にともなってその割合は低下してゆく、と。このことは、社会的背景との関係ともつじつまが合う。というのも、「宗教的回心」の非合理的な性質は、それが比較的高い割合で存する発展初期段階の小規模な宗教集団の性質にも反映され、その高い霊性は合理的な社会からの圧力を招きやすいと考えられる一方で、「宗教的回心」の割合が小さい大規模な宗教集団は、合理的な社会とも接点をもちやすくなる、という説明も成り立つからである。ただし、社会と調和を生み出すことのできる大規模な宗教集団であれ、その中核は「教師」つまり「宗教的回心」であることを看過してはならない。たとえその割合が低いとしても、宗教集団は「宗教的回心」を軸に構成されているのである。このように見れば、「宗教的回心」という切り口から、宗教集団の展開と構造を捉えるという可能性も切り拓かれてこよう。たとえば、「宗教的回心」の証言が多く報告される宗教集団は、発展初期もしくは発展途上にあると言えるであろうし、また公にされる「宗教的回心」の証言は指導者もしくは中核的な信者のものである可能性が高いとも言い得るであろう。いずれにしてもその要点は、「宗教的回心」は、宗教集団の構造を支える中心軸であり、また宗教集団の展開の起点ともなる、ということである。言ってみれば、「宗教的回心」は宗教集団の生命力の源泉なのである。

この点に、さらに人間学的な考察を重ね合わせてみたい。拙著『宗教学的回心研究』で論じたように、「宗教的回心」は、「宗教的人間」の存在構造を根底から支える「垂直軸」が据えられる中心契機であった。この「宗教的回心」が人間個人ば

かりではなく、宗教集団に対しても中心軸を提供するとすれば、一人の宗教的天才に啓示される「垂直軸」は、当の本人の中心軸に留まるのではなく、宗教的集団に共有される中心軸ともなるのである。もしそうなら、この「垂直軸」が徹底した自己否定の末に受動的に獲得され否定的に維持される、別言すれば己を捨てることでは己を得る、という逆説は、「宗教的人間」個人のみに当てはまるのではなく、宗教集団にも言えることなのかもしれない。たとえて言うならば、ちょうど低気圧の中心に大気が流れ込むように、徹底した自己否定の場のもつ求心力に人が引きつけられるのである。このように否定の上に基礎づけられる、別言すれば「垂直軸」によって逆説的に秩序づけられている点こそ、宗教集団がそうでない社会集団から根本的に区別されるところと言えよう。その意味で、宗教集団は、単なる慈善的な奉仕集団ではないし、ましてや利害関係で結束している集団でもない。そうではなくて、人間の合理的で打算的な意志というよりも、「垂直軸」によって逃れがたく結びつけられている集団なのである。言ってみれば、宗教集団は、人と人との「横」の繋がりの他に、「垂直軸」との「縦」の繋がりとという強力な紐帯をもつのである。そのように考えれば、社会から厳しい批判や非難に晒されたとしても、その宗教集団に留まろうとする人々が少なくないという事実もある程度説明できよう。確かに、大規模な宗教集団では、利己的あるいは合理的な動機によって従う多くの人々を抱えているはずであり、それゆえに非宗教的な社会集団としての側面もある。そうであるがゆえに、『中世におけるイスラームへの回心』のなかでブリットがおこなったような統計学的な処理もマクロ的には有効だったのである。しかしながら、宗教集団を特徴づける結束力が、人々の合理的な選択や人情的な絆によるというよりは、むしろ非合理的な被捕捉力、換言すれば「垂直軸」の求心力に他ならないとすれば、とりわけその核心的なミクロ的な要所において宗教集団は他の社会集団から根本的に区別されることになる。要するに宗教集団は、その「垂直軸」を共有するがゆえに宗教集団なのである。そして、この中心軸たる「垂直軸」が受動的に獲得され、否定的に維持される以上、「宗教的人間」がそうであったように、宗教集団もまた逆説的に在るものなのかもしれない。もしそうなら、宗

教集団は、己を捧げる先にこそ繁栄があり、己を生かそうとする時、滅びへの道を歩み始めると言えるであろう。

以上の考察を支えるには、今回提示したデータはまだまだ脆弱であることは否めない。さらなる実証的な裏づけは今後の課題としたい。しかしながら、人間存在の逆説性への着眼を、「個」から「集団」へと拡張させる可能性を示したという点で、本稿の意義を認めておきたいと思う。将来的には、この着想を「宗教人間学」の集団論へと練り上げてゆきたいと考えている。

〈キーワード〉 宗教集団、回心類型、宗教年鑑、宗教人間学

注

- (1) Austin, R. L., Empirical adequacy of Lofland's Conversion Model, *Review of Religious Research*, 18, 1977.
- (2) Piarczyk, T., Conversion and Alternation processes in the youth culture : A comparative analysis of Religious transformations, *The Brainwashing / Deprogramming Controversy*, edited by D. G. Bromly & J. T. Richardson, E. Mellen Press, 1983.
- (3) Nock, A. D., *Conversion*, Oxford Univ. Press, 1933
- (4) Snow, D. A. & C. L. Phillips, The Lofland-Stark Conversion Model : A Critical Reassessment, *Social Problems*, 27, 1980.
- (5) Beckford, J. A., Accounting for Conversion, *British Journal of Sociology*, 29, 1978.
- (6) Buliet, R. W., *Conversion to Islam in the Medieval Period*, Harvard Univ. Press, 1979.

Development and Structure of religious groups : A typology of conversion and an analysis of "Shūkyōnenkan"

Yukio Tokuda

Focusing on the interrelation between types of conversion and features of religious groups, this paper is an attempt to comprehend the development and structure of religious groups. According to a chronological analysis of "Shūkyōnenkan" (from 1923 to 2005), it can be said that a high ratio of religious leaders to followers is observed in religious groups with small membership that the percentage often decreases along with a growth in number of followers. This would indicate that the presence of religious leaders plays an important role in the development of religious groups. Additionally, religious leaders are central to the structure of a religious group. Assuming that they are more inclined to go through religious conversion, we could say that religious conversion becomes both a historical origin and a structural center of a religious group. This is, needless to say, a hypothesis that requires further verification. It is significant, however, in that the premise demonstrated in this article extends the conventional boundary of my conversion study beyond that of individual existence toward a communal process and structure.